

2007 年度 I C U 夏期日本語教育 コース報告

コース責任者

C1		部分 2 セクション
Ⅰ 担当講師名 永富あゆみ(コースヘッド)・佐藤友美・福富七重		
Ⅱ 学生のうちわけ(コース中3回クラス分け有り。以下、最終週のセクションのうちわけ)		
学生数	A: 8名 (男性3名・女性5名) B: 9名 (男性4名・女性5名)	
国籍	A: カナダ3名、アメリカ、インドネシア、ウガンダ、ケニア、ドイツ 各1名 B:ドイツ2名、アルゼンチン、オーストラリア、カナダ、日本、コートジボワール、中国、フィリピン 各1名	
Ⅲ 教材(書名、扱った課の番号など)		
主教材	Japanese for College Students, Basic Vol. 1	
副教材	げんき 1 (抜粋) みんなの日本語 初級で読めるトピック25 Japanese for Young People I – Kana Workbook (抜粋) 日本語の教え方スーパーキット	
視聴覚教材	みんなの日本語聴解タスク(抜粋) Japanese for College Students, Basic Vol. 1 (ウェブ) 歌『ありがとう』SMAP、『花火』aiko、『またあえる日まで』ゆず、 『上を向いて歩こう』坂本九	
Ⅳ コースの目標		
4技能の入門レベルの学習と習得を通じ日本についての理解を深める。 聞く: 基本的な日常会話の理解(時間、場所など最低限必要な情報の聞き取り) 話す:生活に必要な基本的日常会話(自己紹介、買い物、場所、嗜好、日常することについての感想等を短い発表にまとめることができる) 読む:ひらがな、カタカナ、漢字(約 158 字)で書かれた簡単な読み物の内容について意思疎通ができる。 書く:ひらがな、カタカナ、漢字を使い原稿用紙2枚程度の作文を書く、ブログに書き込みをする、お礼の葉書を書く。		
Ⅴ 評価の基準		
レッスンテスト(4回)		40%
期末試験		20%
口頭試験(3回、期末の発表含む)		15%
小テスト(ひらがな、カタカナ、漢字)		5%
各課の語彙テスト		5%
宿題(教科書『フォーメーション』、葉書、ブログ書き込み、文化プログラムの講義のレポートなど)		10%
授業中のパフォーマンス		5%

VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
<p>主教材に沿い仮名、挨拶などの表現を終えた後、一週間に約 2 課のペースで進んだ。各課の第一コマに語彙小テストと文法説明の講義(英語)を行い、2セクションに別れてドリル(新出文法項目の口頭練習約3コマ、新出読み書き1コマ、ロールプレイ及び既習読み書き復習1コマ)を続けた。レッスンテストの当日はテストに入る前に1、2時限目に口頭、読み書きの復習を1コマずつ済ませた。毎回、筆記(聴解、文法、読み書き)にあわせて1対1の3分程度の口頭試験を実施すると共に、4週目以降は最後の口頭発表を念頭におき、ビジターセッションや校外学習を取り入れていった。</p>	
VII 授業の内容	
① 聞く	適宜、授業の中で視聴覚教材をとりいれた。教師がビジターの役を演じ、自己紹介をした後、その内容について確認をするという練習もした。
② 話す	文法講義の授業以外では原則として日本語のみでの口頭練習、活動を行った。
③ 読む	教科書の該当ページ以外にも、生教材(新聞の広告、旅行会社のパンフレット、メニュー、時刻表)などを活用した。
④ 書く	校外学習の御礼のメッセージのほかにも、ビジターセッション後に話した内容についてのまとめ、御礼の葉書を書いたり、日本語のワープロを練習した後、ブログの書き込みを試したりした。最後の口頭発表につながるよう、読み書きの授業で原稿の積み上げも行った。
VIII 校外学習	
日 時	7月31日(火)
行 き 先	小金井神社弓道場
活 動 内 容	<p>小金井神社境内の弓道場で初心者向けの特別講習を受けた。出発前に、道場での挨拶の仕方、説明がわからなかった場合の聞き直し方等の口頭練習を準備しておいた。当日は弓道の基本動作、弓矢の取り扱いの説明の後、実際に的前で立射を行った。後日、読み書きの授業でお礼状を書いた。</p>
IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
<p>・良かった点</p> <p>計3回部分2セクションのクラス替えを行ったが、C1 全体で仲がよかったようだ。ペア・ワークの際、日本語能力のより高い学生が他の学生との協力、指導に気を配る様子も見受けられた。コース開始2、3週間は学生間の日本語能力の差が顕著であったが、最終的には原稿用紙2枚程度の口頭発表の下書き用のまとまった文章が書けるまでになった。これは、教務助手、文化プログラム助手からの理解と協力を得ての個人セッションによる成果と言えよう。また、実際の口頭発表では、どの学生も他の学生の発表をよく聞き、時にはジョークも織り交ぜながら積極的に質問し、さらにその会話を展開していける力を見せてくれた。ビジター・セッションや校外学習でも伝わってきた、既習の語彙や表現を駆使して日本語で意思疎通をはかろうという意欲と努力の集大成であった。</p>	
<p>・反省点、今後の課題</p> <p>課によって新出文法項目の量、難易度に差があることを念頭に入れ、それにあわせてコマ数を調整するべきであった。特に3、8、9課で十分に定着しないまま次へ進み混乱する学生が出てしまった。8、9課のあたりでは学生の疲れや夏バテの症状も顕著になってくるので、クラス内の活動の仕方にも一層気を配らなければならないであろう。</p> <p>毎年指摘されることではあるが、コース開始前に平仮名を覚えてくるよう指示があっても、準備のないまま来てし</p>	

もう学生がいた。平仮名でつまづくと、教科書を読むこともおぼつかなく、語彙も文法も勉強できずコースのペースについていけなくなる。初めから C1 希望の学生にはサマーコース・チェックイン時までには仮名チャート、ICU のオンライン教材の URL、仮名自習用のワークシート等を郵送しておいた方がいいのではないか。

また、日本語を学ぶ時の心構えをよく説明しておく必要があると感じた。特に、インド・ヨーロッパ言語が何カ国語か話せる学生には、日本語を学ぶのにはより時間がかかること、英語からの類推で簡単に習得できるというわけではないことを強調するべきであろう。

各課の第一コマ(英語での文法講義)の前に、教科書のグラマーノートのページを読んでもらうよう言ったが、実際には語彙テストの勉強のみで終わっていたようだ。第3課ぐらいまでは仮名習得だけでも大変なので仕方がないとしても、途中から文法シートを渡しておき予習の習慣がつくようにすべきであった。ただ、その場合、仮名習得で苦しんでいる学生へのさらなるフォローアップの必要も考慮しなければならないであろう。

日本語ワープロ練習の一環としてブログへの書き込みをしたが、コース全体の中で継続させ、最終の期末発表(スピーチ)の原稿を ブログに残すところまでいければよかったと思う。口頭発表について早い段階で説明しておき、各課のタスクがどうつながっていくのかを意識しながら進めば、手書きの原稿を書く時間が短縮でき、結果としてブログへの書き込みが可能になったかもしれない。

C2		セクション A,B	
Ⅰ 担当講師名			
A:小松 満帆(コースヘッド)、津田 麻美		B: 目黒秋子(コースヘッド)、河原由祐子	
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数 ABともに 15名		ABともに 男性 8名 ・ 女性 7名	
国籍			
A: アメリカ 11名、カナダ 2名、フランス 1名、スイス 1名			
B: アメリカ 12名、カナダ 1名、イタリア 1名、中国 1名			
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）			
主教材		『Japanese for College Students Basic Vol.2』	
副教材		参考・抜粋 『げんき』 『Structural Functional Japanese』 『みんなの日本語Ⅰ』 『日本語コミュニケーションゲーム 80』 など	
視聴覚教材		『Structural Functional Japanese』ビデオ	
Ⅳ コースの目標			
日常会話に必要な基本的言語能力(読む、書く、聞く、話す)を向上させ、日常生活の様々な場面で状況に応じて適切な日本語を用いてコミュニケーションができることを目標とした。また、日本社会・日本文化への理解を深めることも目標に挙げた。			

聞く:ビデオのクラスで、日常生活に有用な表現の聞き取りを行った。また、各課ごとに行われる語彙クイズにディクテーションを取り入れた。さらに、ユニットテスト、期末テストには聴解の問題も出題した。

話す:各課のドリル、ロールプレイによる練習のほか、プロジェクトで口頭発表をした。また、2回のビジターセッションで日本人と会話した。さらに、スピーキングテストを3回行った。

読む:各課の読解教材を使用し、効果的な読み方、正しい答え方を指導した。

書く:毎週作文の宿題を課した。作文のテーマは、その週に学習した新出文法を使用するものをこちらで指定し、添削後、リライトをさせた。また、プロジェクトの一環として、オススの場所の説明を書かせ、コース最終日に冊子にして配布した。

V 評価の基準

文法、漢字、読み物	10%
作文(5回)	10%
クイズ(語彙)	10%
ユニットテスト(文法、漢字、読解、聴解)5回	35%
スピーキングテスト	15%
プロジェクト(発表5%、オススマップ5%)	10%
期末テスト(文法、漢字、読解、聴解)	10%

VI 授業の構成(1週間/1課のうちわけ)

1週間の流れ:1週間に2課進み、2課ごとにユニットテストを行った。

1課のうちわけ:語彙クイズ→文法(フォーメーション、ドリル、ロールプレイ)→漢字(時間の都合上、2課ごとにまとめて導入、練習した)→読み物

VII 校外学習

日 時	7月26日(木)
行 き 先	吉祥寺
活 動 内 容	吉祥寺オリエンテーリング(吉祥寺のオススの場所を探す)

VIII 総括(良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)

・良かった点

・セクション A

コース開始時、15人という比較的大きなサイズのクラスであることにより、各学生への配慮が欠けてしまうのではないかと、学生の発話の機会が削減されてしまうのではないかと懸念があったが、積極的な学生が多く、また、学生同士よく助け合ってクラスを進めることができ、とても雰囲気の良いクラスであった。特にプロジェクトとして行った吉祥寺オリエンテーリングは、グループ内でよく助け合い、学生同士のつながりを強めるのに役立ったといえる。

吉祥寺オリエンテーリングでは、ただ単に吉祥寺を散策するだけではなく、事前に日本人ビジターからオススの場所についての情報を得て、実際にその場所を回り、そのレポートをするという形式をとったため、目的が明確になり、また日本人の若者の行動や文化にも触れることができた。レポートをする際、グループによる口頭発表とオススマップガイドブックを作るという2つの方法をとったが、それぞれの学生が工夫を凝らし、とてもわかりやすく興味深い発表を行い、完成度の高いガイドブックを完成させることができたので、学生にとっても、自信につながったのではないかとと思われる。また、学生から

も「実際に街に出て日本人に質問するのは、難しかったが、自分の日本語を試すことができた」「実用的な表現を使ってみることができた」というコメントがあり、成功したといえるだろう。

また、作文の宿題についてであるが、毎週1本計5本の作文を課したため、学生にとって負担が大きいかとも思われたが、これまできちんと作文の指導を受けたことのなかった学生もあり、回を追うごとに構成力や表現力に進歩が見られ、書く能力を向上させることができたと思われる。学生からも、「5回は大変だったけれど、徐々に慣れてきて、少しずつ書きたいことが書けるようになった」というコメントが寄せられた。

総合的に見て、明るく前向きな学生たちの姿勢により、とても充実したコースになったと思われる。後述するが、レベル的に余力のある学生が多かったため、学習意欲の点で懸念があったが、やる気を失うことなく、それぞれの学生が自分に必要な練習などを自覚し、積極的に取り組むクラスであった。宿題などの提出物も滞ることがなく、学習態度もよかった。

・セクション B

セクション B は真面目に学習に取り組んでいる学生がほとんどであり、クラス運営上大きな問題はなかった。出席率もよく、宿題をはじめ予習復習もきちんとこなし、日々着実に学習が積み重ねられている様子が伺えた。授業中も、やや静かではあったがクラスメート同士よく協力してペアワークやグループワークなどいい雰囲気で行っていた。やや実力の弱い学生も真面目に学習に取り組んだ結果、クラス全体によくついてきていた。最後の吉祥寺マッププロジェクト発表では、グループがよく協力した結果すばらしいものとなった。全体的には成功したプログラムだったと言えよう。

・反省点、今後の課題

・セクション A

プレースメントについていうと、C2レベル以上(ただし、C3ではやや厳しい)というレベルの学生がほとんどであった。そのため、本来のC2レベルに相当する学生にとって、少し厳しいクラスとなってしまった。また、逆に、実際にはC1レベルに近い学生もプレースされておき、その学生にとっては、さらに負担が大きくなってしまった。午後の個別指導の時間以外にも、そのような学生にはできるだけ個別に対応したが、学生側の都合などによりなかなか思うように時間がとれず、完全とはいえなかった。さらに、単位を全く必要としていない学生がおり、指導が困難なときがあった。また、まわりの学生の学習意欲を削いでしまうような場面も時折見られた。また、せっかく発言しているのに、話したいことが多すぎるあまりに、思わず英語に変換してしまう学生も数名いたため、そのたびに注意、指導を行った。

個別指導についても、もう少し効果的な実施方法があったように思われる。まず15人という学生数により、一人の学生に割く時間が少なくなってしまうため、決められた個別指導の時間以外にも個別に対応せざるを得なかった。個別指導の内容は、宿題、テストの添削、指導のほか、会話練習や発音指導も行ったが、前述したようにC2レベルでは易しいという学生が多かったため、質問や文法の補助の必要性があまりなく、学生から「必ず個別指導に行かなくてはならないのか」という疑問も度々聞かれた。エキストラの練習問題を用意するなどの対処をすれば、より有効に時間を使えたと思われ、今後の課題として考えていく必要があると思う。

・セクション B

学生のプレースメントに関してはやや反省点がある。C2のセクション B にクラス分けされた学生の中には、C2の文法事項の多くが既習の学習者がおり、上のレベルのクラスを希望したが C2 に入れられ不満に感じている学生が何

名かいた。これが学習に対する動機の維持にややマイナスに影響したようである。特に夏の期間だけ日本で学習する学生で、上のレベルに入れたほうが、学習意欲の維持の面でよかったのではと思う学生が若干いたが、今回はC3の許容人数もあり上のクラスにあげられないという事情もあった。

C3		セクション A,B	
Ⅰ 担当講師名 西川伊都子(コースヘッド)、西脇英美、橋本ゆかり			
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数 A: 12 名		男性4名 ・ 女性8名	
B: 12 名		男性7名 ・ 女性5名	
国籍 A: アメリカ 12 名			
B: アメリカ 6 名、カナダ 2 名、シンガポール 1 名、中国 1 名、ドイツ 1 名、台湾 1 名			
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）			
主教材		『ICU の日本語3』	
副教材		自作プリント 参考・抜粋『げんき2』 『なかま2』 『みんなの日本語初級 II』 『Situational Functional Japanese, Vol. 2 and 3』	
視聴覚教材		『ICU の日本語3』のオンライン音声ファイル 『みんなの日本語初級 II 聴解タスク 25』 『わくわく文法リスニング』 『Situational Functional Japanese, Vol. 3』	
Ⅳ コースの目標			
初級文型、語彙、漢字 400 字(うち 318 字は既習とみなす)を習得し、日常的な場面でのコミュニケーションが出来るようになること			
Ⅴ 評価の基準			
宿題		10 %	
作文 第一稿(1 %)			
第二稿(1 %)			
最終稿(10 %)		12 %	
スピーチ		5 %	
小テスト 漢字(10 %)			
単語(10 %)		20 %	
チャプター・テスト		35 %	
期末試験		10 %	
口頭試験		8 %	

VI 授業の構成（1週間／1課のわけ）	
1課につき、6～8コマ使った。文型の導入・聴解・練習に4コマ、漢字と読解に2コマ、復習と運用練習に2コマほどである。単語テストは課毎に1～2回、漢字テストは課に1回行った。チャプターテストは、2課終了後あるいは重要文法終了後、口頭試験は中間・期末の2度である。集中講座という性格上、1日に複数の文法・文型が導入されることを考慮し、提出順序を主教材と変えた部分があった。	
VII 授業の内容	
① 聞く	文法・文型の導入後すぐに聴解練習を行い、耳からの定着を図った。
② 話す	文法・文型の導入後、口頭練習を行い、複数の文法・文型を取り混ぜた発展・運用練習なども時間の許す限り行った。敬語の練習では、社会人ビジターと会話、最終週にはスピーチも行った。
③ 読む	主教材の読み物を使用し、大意を取る練習と精読との両方で日本語による理解を図った。また、自作の読み物も使用した。
④ 書く	実際に読み手（聞き手）がいる作文を書かせるようにした。(1)文化プログラムのレクチャーに参加した後、授業で内容や感想をクラスメートに話し、それをレポートとして提出させた。(2)作文プロジェクトとしては、同年代のビジターに聞いた話を書かせた。第一稿は内容の推敲、第二稿は言語の推敲をさせ、最終稿を成績の対象とした。また、作文を添付したビジターへのお礼のメールも出させた。(3)スピーチの原稿は採点対象とはしなかったが、個人指導を行った。
VIII 校外学習	
日 時	8月2日(木)
行 き 先	皇居
活 動 内 容	主教材の読み物で皇居について学び、一般参観に参加、その後見学箇所についての説明のプリントを完成した。
IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
<p>授業では英語の使用を極力避けたが、セクションBでは英語に頼る学生もあり、クラスの雰囲気が損なわれるとの苦情もあった。だが全体としては、セクションA・Bともに積極的な学生が多く活発なクラスで、教師が発話を促さずとも日本語を使って話したがる学生が多かった。</p> <p>大半が自国で既に初級文法を学んだ学生で、中には中級クラスにいた学生もいたが、(気付くのが遅すぎた学生もいたものの)それぞれが自分の弱点を知り、それを克服すべき努力をした。試験の後は個人指導に来させ、間違えた箇所の復習をしたのだが、この個人指導で自分の弱点を自覚したようである。このレベルは初めてという学生もいたが、超人的な努力で、他の学生と遜色ない成果をおさめた。</p> <p>文字の指導はかなり丁寧に行った。判読不可能なひらがな・カタカナを書く学生もあり、宿題で丁寧に添削、漢字も導入時にしっかりと書き方を指導した。その成果か、コース開始時にはかなりの悪筆だった学生もある程度のレベルに達していた。また、漢字指導では、熟語の紹介を取り入れ、語彙の増強を図ったが、作文などで実際に使う者もあった。漢字への興味を持続される効果もあったように思う。</p> <p>作文プロジェクトの指導は個人指導で行った。まず第一稿で内容だけに注目させ、第二稿で言語面に注目させるという段階を踏んだためか、ほとんどの学生が素晴らしい作文を仕上げる事ができた。ピア・フィードバックを取り</p>	

入れていれば読み手をより意識させることが出来、特に内容面で一層効果的な指導が行えただろう。

作文指導でも明らかになったのだが、文法や文型を知ってはいても、それを使ったナラティブは出来ない学生がほとんどであった。作文ではその点を指摘できたが、段落レベルで話す練習を行う練習をもっと取り入れる必要があった。

どんなコースにでもありがちなことであるが、時間的な余裕がなく、実際の運用に結びつけるための練習が足りなかった。限られた時間を活用してどのように効果的に習得に結びつけていくか、今後の課題として考えていきたい。

C4 (2007 年度)		1 セクション
Ⅰ 担当講師名 濱家優子 ・ 畠山 衛 ・ 平野マリ子		
Ⅱ 学生のうちわけ		
学生数 男性 9名 女性 12名 計21名		
国籍 アメリカ合衆国 12名 韓国 2名 ドイツ 1名 ロシア 2名 日系アメリカ人(アメリカ国籍) 2名 カナダ 1名 中国 1名		
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）		
主教材	『アルバイト』(ハンドアウト) 『日本語中級 J-301』スリーエーネットワーク(第3課～10課まで)	
副教材	読み物 星新一『悪魔』 レベル別日本語多読ライブラリー4『雪女』ASK 『地球温暖化』について その他、各自作成したもの (C4 のファイル参照)	
視聴覚教材	聞き取り 毎日の聞き取りプラス 40(上)(下)、楽しく聞こうⅡ より DVD 『電車男』東宝 『武士の一分』松竹 歌 『バンザイ』ウルフルズ 『涙そうそう』夏川りみ 『リンダリンダ』ブルーハーツ 『粉雪』レミオロメン	
Ⅳ コースの目標		
(1)教科書「日本語 J-301」を使って、新しい文法、表現、言葉、漢字を勉強して、聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする力をつける。 (2)プロジェクト「日本についてインタビューしてしらべる」を完成させる。サマーコースで勉強した文法、表現、言葉、漢字を使って、インタビューについてまとめる。そして、発表する。 (3)日本人とのコミュニケーションやメディアを通して、日本のことについて学ぶ。		
Ⅴ 評価の基準		
① パフォーマンス(5 点) <Listening Exercise; Class Discussion; Participation on Exercises on Textbook; Conversation>	10%	
② 宿題(10 点: レクチャーレポートとブログも含む)	15%	
③ クイズ(10 点: 単語・漢字)	10%	

④ 作文(10 点: A~D 4回)	10%
⑤ スピーチ(2回)	5%
⑥ レッスンテスト(100 点: 3回)	20%
⑦ プロジェクト(50 点: 発表・レポート)	15%
⑧ 期末試験(100 点: オーラル、2回・筆記)	15%
VI 授業の構成 (『日本語 J-301 を中心とした 1 課のうちのわけ』)	
<p>① (予習として)その課の漢字ワークシート・文法ワークシートを宿題として出す。</p> <p>② その課の漢字・単語クイズを行う。</p> <p>③ その課で扱う文法事項の確認、練習を行う。(聞いたり、話したり、書いたりする活動+練習問題)</p> <p>④ その課の本文を読む。(読む前の予習も場合によってはあった。)</p> <p>⑤ 教科書の文章の型、Q&Aを確認する。</p> <p>⑥ 教科書の言葉のネットワーク・話してみようの部分を確認、練習する。(これに関連したテーマでディスカッション、書かせる活動なども行った。</p> <p>①～⑥の基本的な流れの中にリスニング練習、ビデオ、ビジターセッション、スピーチ、漢字練習、読解などを通して、教科書以外での聞く・話す・読む・書くの 4 技能を使って行う活動も入れた。</p>	
VII 授業の内容	
① 聞く	主教材に『聞く』ことをターゲットとする練習がなかったため、一週間に数回、リスニング教材を使用して、聞く練習を行った。その他は、独立した練習ではなく、クラスでのディスカッションで話したり、聞いたり、発表を聞いて、質問をしたりした。また、日本語で映画をみて内容を確認するというような活動も行った。
② 話す	話すことにおいては、教師と会話することをはじめ、授業に関することについては、いつも日本語で話した。授業の活動としては、教科書で読んだ読み物について、クラスでディスカッションをしたり、スピーチなどを行ったりした。さらに、インタビュープロジェクトとの発表を行った。
③ 読む	基本的には、教科書の課にある読み物を読んだ。その他は、読解として、違う本などから3編選んで読んだ。(「副教材」の欄を参照)
④ 書く	教科書の課ごとに学習した文法やことばを使いながら、レッスン作文を書いた。さらに、インタビュープロジェクトのレポートを書く為の練習として作文を4回書いた。最後の発表では、全員がパワーポイントを作成した。
VIII 校外学習	
日 時	7月26日(木)
行 き 先	浅草『雷5656茶屋』
活 動 内 容	日本文化体験という目的から、浅草の『雷5656茶屋』が行っている「雷おこし」作り体験に参加し、職人さんのご指導のもとそれぞれが雷おこしを作った。作る前に雷おこしについてのビデオも見た。さらに、ワークシートを使って、浅草の町についても調べてもらった。 (濱家)

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

本コースは部分的 2 セクションということで、全体で 21 名であったのを 11 名、10 名の 2 セクションにわけ、内容によって合同の授業と、各セクションに分かれての授業を使い分けた。3 名の講師は特に担任を決めずに、両セクションを交代で担当した。これにより、3 名の講師によって各学生を指導・評価することができたのは良かった。

学生は 21 名で、そのうち大学院生も 6 名と多く、また北米・アジアだけでなく欧州からも数名参加していた。それぞれに様々な文化背景を持ち合わせており、夏期コースの人数としては多いほうだったが、幅広い視点に触れることができたと言う点では学生同士も刺激になったと思う。学生はほとんど皆まじめで、遅刻・欠席も少なく、課題に対して積極的に取り組み、授業中もよく参加していた。一方で、ごく一部にはムラのある者もいたのは残念であった。夏だけ日本に来ている場合と、1 年いた後の最後の夏に勉強するのでは同じ時間でも勉強への姿勢が変わってしまうのはある程度仕方のないことなのかもしれない。

期間全体を通して全員が自分でテーマを選び、インタビュー・プロジェクトに取り組んだ。インタビューの対象として学生とほぼ同数の日本人会話ボランティアの方に教室に来てもらい、効率よくインタビューができた。学生たちも生の日本語にふれ、それぞれにインタビューを楽しんでいたことができたようだ。ただ、ボランティアは女性の方が多く、性別に偏りがあったので、学生の中には両性からの意見がもっと聞きたかったという指摘があったが、これは来年以降改善が望まれる点である。インタビュー結果とそれに対する考えをまとめた発表では各学生が創意工夫を凝らし、完成度が高くすばらしいものが多くあり、教師側も学ぶべきところがあった。

本コースでは学生の自由な自己表現などを目的として Blogger.com を使い、学生一人一人の公開型ブログを取り入れた。学生は自分で書きたいことを楽しんで書いていたようである。教師も校外学習や留学の日常生活の様子、日本語の授業に対して学生がどう思っているかなどを学生の視点から少しでも知ることができ、参考になる部分もあった。一部の学生には書くことをストレス管理に役立てている者も見られた。しかし、コース期間が 6 週間と短く、他の多くの宿題もある中では、形式に慣れ、課題として書くのに精一杯で、こなすのが目的になってしまった面もあったかもしれない。より効果的な使用法のさらなる検討が必要であろう。

学生の中には、継承語として日本語を学習しており、会話聴解能力に比べて、漢字が特に弱いという学生が数名いたが、その弱点に対する課題意識の有無からか、学生により単語・漢字小テストでの成績に大きな違いがあった。本人の動機付けになるように働きかけもしたが、残念ながら単語・漢字小テストには反映されるほどではなかった。今後も継承語学習者が、参加するケースも見られるだろうが、より一層の配慮・対策が求められるかもしれない。

そのような点もあったものの、全般的には一定の成果を上げ、学生もある程度の達成感を持って終えられたのではないかと思う。(畠山)

C5		1 セクション	
Ⅰ 担当講師名			
川上 麻理 (コースヘッド)		林 志野	
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数	5名	男性 4名 ・ 女性 1名	
国籍	アメリカ 4名 台湾 1名		

Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）		
主教材	『日本語中級J501』第1課～第6課 スリーエーネットワーク 『ICU中級コース2漢字』 ICU	
副教材	『速読用の文化エピソード』 凡人社 『中・上級者のための速読の日本語』 The Japan Times 『中上級の日本語』 創作集団にほんご 新聞記事	
視聴覚教材	『毎日の聞き取り50日（下）』 凡人社 『新毎日の聞き取り50日（上）』 凡人社 『ニュースで学ぶ日本語』 凡人社 テレビ番組（情報番組、ドラマ）	
Ⅳ コースの目標		
<ul style="list-style-type: none">・ 約200字の漢字、37の文型が使えるようになる。・ さまざまなトピック、スタイルの読み物が読めるようになる。・ 自然な速度の日本語を聞いて、必要な情報が取れるようになる。・ 読んだり聞いたりしたものについて、自分の考えや感想を的確な表現を使って話したり書いたりすることができるようになる。		
Ⅴ 評価の基準		
テスト1、2（漢字、文法、読解）		20%
期末テスト（漢字、文法、読解）		15%
話し方（話し合い、スピーチ、メモ提出、テスト）		15%
聞き方（ワークシート、テスト）		10%
作文（クラス内作文、レクチャー、校外学習、テスト）		10%
クイズ（漢字、単語、文法）		10%
宿題提出（漢字、文法、読解）		10%
プロジェクト（レポート、発表）		10%
Ⅵ 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）		
週に1課のペースで進めた。予習（漢字、文法、読解、話してみよう）と復習（文法、読解）の宿題を課し、漢字、単語、文法の小テストに加え、二週に一度レッスンテストとスピーチを行い、学習内容の定着を図った。スケジュールは週によって多少異なるが、およそ以下の内訳で行った。		
教科書	漢字	1～2コマ
	文法	1コマ
	本文読解	2コマ
	ことばのネットワーク	1コマ
	話してみよう	1コマ
その他	話し方（スピーチ）	2週に1コマ

作文	1コマ
速読	1コマ
リスニング(ビデオ、テープ)	2コマ
プロジェクト	1コマ
VII 授業の内容	
① 聞く	ビデオ教材は主に大意取りと日本文化の紹介、それに伴う意見交換の目的で使用し、テープ教材は内容理解および表現の正確な聞き取りの目的で使用した。その他、授業中の教師の説明やクラスメートの発表、ビジターとの会話、文化プログラムのレクチャー、校外学習でのガイドの説明を聞き取るなど、さまざまな場面で聞く機会を設けた。
② 話す	教科書の「話してみよう」では、毎週、テーマに沿って作ったメモにしたがってディスカッションを行った。また、各自で選んだ「ニュース」や「本・映画」についての作文をもとに、ビジターを招いてスピーチをする機会を設けたり、コースの最終日にはプロジェクトの発表を行った。
③ 読む	教科書の本文を精読したのに加え、速読用の読み物や新聞記事を扱った。毎回、本文精読の後で内容についてのディスカッションを行い、宿題ワークシートによって、内容理解の確認を行った。
④ 書く	作文は、説明文、比較文、意見文のジャンルで、内容、構成、表現について書き方を説明した後、クラス内で原稿用紙 800 字を目標に書かせた。また、校外学習や文化プログラムのレクチャーの内容についても作文の課題を与えた。毎週、個人指導の時間にフィードバックを行い、うち2回はスピーチの指導につなげた。さらに、レポートの書き方の指導を行い、コースのプロジェクトとして各自が選んだテーマについて、1500 字程度の調査レポートを課した。
VIII 校外学習	
日 時	7月27日(金)
行 き 先	江戸東京たてもの園
活 動 内 容	当日は現地集合としたが、全員が遅れることなく集まった。ボランティアガイドの説明を聞きながら、高橋是清邸や三井八郎右衛門邸など歴史を伝える建物をはじめ、江戸時代の暮らしや商売の道具・商品などを展示した昔の商家、銭湯、居酒屋など、情緒あふれる下町の風情を見学した。ガイドの方の説明を聞き取るのは難しかったはずだが、学生は皆熱心に耳を傾け、メモをとっていた。後日、校外学習についての作文に、学生のほとんどが「非常に興味深い展示が多く、行ってよかった。」という感想を書いていた。
IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
<p>・ 良かった点</p> <p>学生数が少なかったため、一人一人に時間をかけることができた点が最も良かったことである。特に、個人指導の時間は、作文のフィードバックや読みの練習に使ったが、各学生の文法事項その他の質問にも答える時間的余裕が十分にあった。また、教室活動だけでなく、文化プログラムの企画に積極的に参加したり、サマーコーススタッフや会話ボランティアの方々など日本人と積極的に接する傾向が見られ、それが学生の日本語能力の向上に非常に役立っていたように思われる。</p>	

四技能をバランスよく伸ばすようコースデザインをしたが、自国で「読み」に力を入れてきている学生がほとんどで、「聞く」「話す」の力を伸ばしたいという希望も多くあったため、それを念頭に置きながらコースを進めた。リスニングにおいては、当初使用していた教材が、大意を取ることはできても細かい部分を正確に聞き取るという点でやや高度であると判断し、変更した。話し方については、予め考えてきたことを発話することはできても、ディスカッションの司会や相手の発言を理解したうえで自分が発言するのは依然として難しいようだが、スピーチの場合には、スピーチで使われる表現や態度などにゆっくりだが進歩が見られた。これは、毎回参加してくださった会話ボランティアの方々の内容に踏み込んだご質問やご意見によるものが大きかったと感じる。

また、事前に書いた作文を十分なフィードバックを行ったうえでスピーチの指導につなげることができた点も良かった。書き方については、コースの初めと終わりに書いた学生の作文を比べると、短時間にまとめた文章が書けるようになったことが目立った進歩だと言える。

プロジェクトは学生が最も積極的に取り組んだものだったように思う。各自の選んだテーマについて「イメージ調査」を行ったが、短い期間にかなりの数のアンケートをとり、分析した結果をレポートの書き方に沿ってまとめ、最後に口頭発表を行った。

・ 反省点、今後の課題

四技能の中の「読み」については、反省すべき点がある。教科書の精読のほかに速読の時間を設けたが、学生のレベルからするとやや読みやすい教材を選び、読み自体にはあまり苦勞させず、読んだ後の要約文を完成させる設問を解くことに重点を置いた。ただ、さらに高度な内容のものに挑戦できる学生にとっては、内容にしても読む分量にしても物足りなかったのではないかとと思われる。学生からも新聞記事を読みたいという要望があったことを考えれば、1コマの中で各自のペースで、新聞記事などをより多く読ませる方法もあったと思う。

漢字については、短期間のスケジュールの中で週によっては2コマ入れなければならないことがあり、コースデザインをするうえで苦勞した。また、初級文法の復習に時間を割く余裕があればなお良かったと思う。

全体としてほとんどの学生が真面目で学習意欲も高かったが、その中で一人、最初のプレースメントテストの結果に満足せず、モチベーションを保つのに苦勞した学生がいた。欠席はせず、提出物もほぼ提出してはいるものの、授業態度に問題があるため、他の学生に影響しないかと心配したが、個人指導で学習および生活態度について指導するなどして本人もなんとか乗り切った。これについては、昨年も同じようなケースがあったが、所属の大学のプログラムとSCJのコースのレベルの認識のずれがあることは明らかで、対処すべき点なのではないかと考える。

最後に、今年は、少ない学生数ながら、体調を崩して入院し、コース途中で帰国せざるを得なかった学生がいた。数少ないスタッフでできる限りの対応をした結果、無事帰国に至ったが、今後のことを考えれば、サマーコースの受け入れ方法について改善すべき点や緊急時の対応の仕方について我々教師も心構えをしておくべきことがあると考えさせられた。

C6	1 セクション
I 担当講師名	
(コースヘッド) 数野恵理	藤井陽子
II 学生のうちわけ	
学生数 : 7 名	男性 2 名 ・ 女性 5 名
国籍 アメリカ2、アメリカと日本の両国籍1、台湾1、韓国1、ブルガリア1、ギリシャ1	

Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	『日本語中級 J501 中級から上級へ』第 7～10 課 『ICU 中級コース 3 漢字』
副教材	『文化中級日本語1』第 2 課（敬語・待遇表現） 『留学生のための論理的な文章の書き方』 『未来への地図 新しい一歩を踏み出すあなたに』星野道夫 『オンリー・ミー』『危機』三谷幸喜 『こうばしい日々』『メロン』江國香織 『ICU web campus ～卒業生の活躍～』『アンゴラから』稲田菜穂子 新聞記事： 「町田のコンビニ強盗」「携帯使用 高校生 96%」「交通事故死 51 年ぶり 6500 人割る」 「東大生の 8 割将来心配」「居場所」「環境問題 最重要は温暖化」「宇宙旅行を体験すると地球を大切にすること心芽生える」「いじめ絡みの傷害・恐喝」ほか
視聴覚教材	映画「みんなのいえ」 映画「世にも奇妙な物語・映画の特別編～結婚シュミレーター～」 テレビ番組「エコ宣言」 テレビ番組「星野道夫 夢の力 ～好きなことならきつと～」 テレビ番組「動物奇想天外～ゾウの時間 ネズミの時間～」 ニュース「飲酒運転」「強盗事件」「自転車事故」「イチローMVP」「遊具の事故」「炎天下、車内に幼児置き去り」「出生率上昇」
Ⅳ コースの目標	
<p>聞く：ニュース、ドキュメンタリー、映画の内容を理解し、要約をしたり、感想や意見を述べたりできるようになる。話を聴きながらノートが取れるようになる。</p> <p>話す：場面に応じた適切なスタイルで正確に流暢に話すことができるようになる。</p> <p>日常会話のほか、話し合い、ディベート、スピーチ、発表ができるようになる。</p> <p>読む：新聞記事、小説、エッセー、説明文、報告書などが読めるようになる。</p> <p>知らない言葉があっても、知っている漢字から意味を推測して文章が読めるようになる。</p> <p>書く：約 200 の新しい漢字とその漢字を使った言葉が書けるようになる。</p> <p>ブログや作文など、読み手を意識して正確に書けるようになる。</p> <p>書き言葉を使い、2500 字程度のレポートが書けるようになる。</p> <p>パワーポイントが作れるようになる。</p> <p>その他：新しい言葉や文法を覚え、使えるようになる。</p>	
Ⅴ 評価の基準	
<読む・書く・漢字・文法・ことば> 宿題（漢字・文法・読解）4／クイズ（漢字・文法）4／ 試験ⅠⅡⅢ（漢字・文法ことば・読解）18／	60%

<p>期末試験(漢字・文法ことば・読解)18／ 作文ⅠⅡⅢ・試験Ⅱ(作文) 5／ブログ2／ プロジェクト・レポート9 <聴く・話す> ビデオ・ワークシート2／ビデオ試験7／ 試験Ⅱ(作文:ドキュメンタリー)2／ 試験ⅠⅡ(インタビュー)6／レクチャーの報告1／ 話し方クラスのメモ1／ディベート2／ 3分スピーチ 5／期末スピーチ 3／ プロジェクト発表7／期末試験(インタビュー)4</p>	<p>40%</p>								
<p>Ⅵ 授業の構成(1週間／1課のうちのわけ)</p> <p>教科書(J501)は漢字、文法、本文読解、ことばのネットワークの順で授業を行い、宿題として漢字の読み方予習、文法の復習、読解の予習・復習を課した。</p> <p>教科書(漢字1～2時間、文法1～2時間、本文読解 2時間、ことば1時間)</p> <p>教科書以外で扱ったスキル別の授業は以下の通りである。</p> <p>ニュース・ドキュメンタリー番組1時間、映画1時間</p> <p>速読1時間、作文・プロジェクト1時間、話し方(話し合い、ロールプレイ、ディベート)1時間</p> <p>その他、全員が週に1度授業の開始時に3分スピーチを行った。</p>									
<p>Ⅶ 授業の内容</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="199 1216 403 1283">① 聞く</td><td data-bbox="403 1216 1396 1283">・ニュースをディクテーションで正確に聞き取る。ドキュメンタリーを見ながらノートを取り、要約したり意見を述べたりする。映画を見て、情景描写をしたり感想を述べたりする。</td></tr> <tr> <td data-bbox="199 1283 403 1350">② 話す</td><td data-bbox="403 1283 1396 1350">・スピーチ、ビジターセッションでの会話、話し合い、ロールプレイ、敬語と待遇表現、ディベート、プロジェクト発表、読解やビデオの授業での司会など。</td></tr> <tr> <td data-bbox="199 1350 403 1417">③ 読む</td><td data-bbox="403 1350 1396 1417">・教科書本文の精読。新聞記事、エッセー、短編小説などの速読と要約。ウェブサイトの便利な利用法の紹介。</td></tr> <tr> <td data-bbox="199 1417 403 1485">④ 書く</td><td data-bbox="403 1417 1396 1485">・書き言葉の指導。作文(原稿用紙)、ブログ、プロジェクト・レポート(2500字)、パワーポイントなど。</td></tr> </table>		① 聞く	・ニュースをディクテーションで正確に聞き取る。ドキュメンタリーを見ながらノートを取り、要約したり意見を述べたりする。映画を見て、情景描写をしたり感想を述べたりする。	② 話す	・スピーチ、ビジターセッションでの会話、話し合い、ロールプレイ、敬語と待遇表現、ディベート、プロジェクト発表、読解やビデオの授業での司会など。	③ 読む	・教科書本文の精読。新聞記事、エッセー、短編小説などの速読と要約。ウェブサイトの便利な利用法の紹介。	④ 書く	・書き言葉の指導。作文(原稿用紙)、ブログ、プロジェクト・レポート(2500字)、パワーポイントなど。
① 聞く	・ニュースをディクテーションで正確に聞き取る。ドキュメンタリーを見ながらノートを取り、要約したり意見を述べたりする。映画を見て、情景描写をしたり感想を述べたりする。								
② 話す	・スピーチ、ビジターセッションでの会話、話し合い、ロールプレイ、敬語と待遇表現、ディベート、プロジェクト発表、読解やビデオの授業での司会など。								
③ 読む	・教科書本文の精読。新聞記事、エッセー、短編小説などの速読と要約。ウェブサイトの便利な利用法の紹介。								
④ 書く	・書き言葉の指導。作文(原稿用紙)、ブログ、プロジェクト・レポート(2500字)、パワーポイントなど。								
<p>Ⅷ 校外学習</p>									
日 時	8月2日(木)								
行 き 先	相田みつを美術館(有楽町駅 国際フォーラム内)								
活 動 内 容	<p>学芸員による説明を聞いてから、館内をまわって詩を読んだり、短い映像を見たりする。その後で筆ペンで詩の書き写しをし、アンケートに感想を記入して美術館に提出。</p> <p>翌週のスピーチで、印象に残った詩をクラスメートに紹介し、感想を述べる。</p>								

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

・ 良かった点

社会人が混ざっていたこともあるのか、意識が高く、学習態度の大変よいクラスだった。授業中も活発に発言し、授業外でも積極的に日本語を使っている様子が見受けられた。また、新出のことばや文法も全員が作文、ブログ、スピーチなどですぐに使って身につけようとしていた。コースのはじめに、このような心構えをきちんと伝えておいたのもよかったのかもしれない。

例年に倣い、毎日授業の開始時に3分スピーチを行うことで、人前で話す機会が増やせてよかった。また、今年はクラス内でブログを開設し、週に1度投稿することを課題とした。こちらから内容については指示しなかったが、授業で扱ったテーマに関する意見、社会問題、異文化体験など多岐にわたり、自己表現の場になると同時に、お互いをより深く知る場となった。

C6のレベルになると得意なスキルと苦手なスキルでかなり差があったが、個別指導の時間が大変有効に使えた。人数が少なかったこともあり、通常の1対1の個別指導を全員に週に20分確保し、さらに週に1時間を中級漢字のグループプレッスン、もう1時間をリスニングのグループプレッスンとして設定することができた。漢字がC3終了レベルの学生が2名、C4終了レベルの学生はC6の漢字に加え、それぞれC4、C5の漢字教材を1冊終えたので、作文などでの漢字使用が大きく伸びた。また、リスニングが極端に弱い学生がいたので、その学生を中心に「毎日の聞き取り」を使用してリスニング対策を行い、リスニング力アップを図った。課外活動で行った「相田みつを美術館」も、日本語で詩を味わい、人生について考えることができた大変好評だった。短い詩の奥にあるものを掴み取り、翌週のスピーチは大変深い内容となった。

今年はサマーコース終了後帰国する学生がほとんどだったが、引き続き日本語に触れ続けたいという要望があり、ブログの継続、インターネットでのリスニング教材の紹介、読解教材の紹介などをしたので、コース終了後のケアもできたのではないと思う。

・ 反省点、今後の課題

先学期の通常コースで欠席が続いてJ6を落とした男子学生がサマーコースでもう一度同じレベルを受講したが、今回も最初の数日登校しただけで学校に来られなくなってしまい、大変残念な結果となった。

また、漢字レベルが初級終了レベルの日本在住20年の社会人の学生は会話が大変流暢なのでC6にプレーしたが、日頃アカデミックな分野に触れていないため、漢字や漢字語彙の習得だけでなく、別の面でも壁があった。英語でも調査報告の文章を読んだり書いたりしたことがない場合、アカデミックな日本語の習得を最終目標としているプログラム、特にアカデミックな日本語に焦点が当てられるようになる中級後半のコースでやっていくには難しい面がある。漢字あるいはアカデミックな日本語など、どちらか一つが合っていないだけならよいが、二つ重なると学生にはかなりの負担になってしまうので、プレイメントの際にはレベルだけでなく学習背景や年齢をもっと重視すべきだった。

授業に関しては、日常会話に問題はなさそうだと判断し、当初ロールプレイを1度だけの予定にしていたが、日本に来たばかりの学生にはもっとロールプレイなどの練習が必要だということがコースの途中でわかり、後半になってから話し方の時間を追加した。本来なら前半にもっと日常会話を入れておいたほうが役立ったと思う。

また、帰国後にもインターネットのサイトを読んで日本語の練習ができるようにという意図から、インターネットのサイトにルビを振ったり、言葉の意味を表示させたりするサイトをコースの途中で紹介したが、大変ニーズが高く、大半

の学生からコースの最初に教えてほしいという声が出た。1年間日本に留学している学生だと最近はこのようなツールをすでに知っている場合が多いが、今回は誰も知らなかったので、夏に日本に来たばかりの学生には早めに紹介したほうが役立つことがわかった。

C7A（上級導入コース）		1 セクション	
Ⅰ 担当講師名 三上京子(コースヘッド), 萩原章子			
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数	5名	男性	2名 ・ 女性 3名
国籍 アメリカ 4 名、日本 1 名			
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）			
主教材	漢字テキスト： 『Kanji in Context ー中上級学習者のための漢字と語彙 Workbook 』 Vol.1 （The Japan Times） 第1回～第 76 回 読み教材： (1)新聞・雑誌・インターネット記事等より 『ありがとう』といわないモンゴルの文化」「自己ゴミ化計画」「脳トレの報酬全額を研究費に」「サマータイム 省エネ効果狙い国が検討」「『眠れる20代』掘り起こせ…低投票率打開へあの手この手」「エキナカ エキュート品川の開発」「漫画家 水木しげるさん」「つかれたうそには気づかない」 (2)小説・評論等 「働くことがイヤになったとき」『プロ論』養老孟司 『蜘蛛の糸』芥川龍之介 『お母さん』と言う女 VS『ママ』と言う女』『アナタとわたしは違う人』酒井順子 『坊ちゃん』(一部抜粋) 夏目漱石		
副教材	『どんな時どう使う日本語表現文型 500』(アルク)より抜粋		
視聴覚教材	録画ビデオ 1)「世界一受けたい授業ー書道ー」 2)「ニュース ーゴミを宝に バイオ燃料ー」 3)「プロジェクトX 魔法のラーメン」 4)「プロフェッショナル ーワインの森へようこそー」 5)「SMAP STATION 世界で活躍するジャパニーズアニメ」		
Ⅳ コースの目標			
日本語と日本文化に対する認識と理解を深め、日本社会における様々な事象や現代世界が共通に抱える問題に対して、自身の考えを適切な日本語で表現できるようにする。特に、会話能力と読み書き能力の乖離を埋めるべく漢字および漢字語彙の習得を第一の課題とし、上級学習者またはネイティブとしてバランスのとれた日本語力の養成をめざす。			

V 評価の基準		
定期試験 2回 (中間:10% 期末:15%)		25%
宿題 (読解予習シート:10% 課題レポート 5%)		15%
小クイズ (漢字:15% 文型:10%)		25%
スピーチ(討論)		10%
個人プロジェクト 論文:15% 小説:5%		20%
授業参加		5%
VI 授業の構成(1週間/1課のうちわけ)		
漢字・語彙:2~4コマ 文型:2コマ 読解:3~5コマ 論文プロジェクト:2コマ 討論:1コマ その他ビデオ視聴、ビジターセッション、敬語、e-mail の書き方、などが週1~2コマ		
VII 授業の内容		
① 聞く	テレビ番組を題材として、聞きとった内容を再現したり内容について話し合ったりした。学生たちはいずれも、日常的な場面においては「聞く」ことにまったく困難が感じられない。一方、専門用語等の漢字語彙が含まれたテキストについては、おおまかな内容は取れるものの、日常的でない語彙の意味・用法を理解し運用するところまではいかないため、タスクシートなどで主に語彙や表現の確認、定着をはかった。	
② 話す	聞くこと同様、日常的なことにに関して「話す」ことにほとんど問題がないが、やはり使用語彙も限られ、スタイルという点でもフォーマリティに欠けるため、場面によっては不適切な話し方となってしまう。そこで授業では、フォーマルな場での語彙の選択および話し方に特に焦点をあてた。「討論」や論文プロジェクト、小説プロジェクトなどの発表時に、きちんとした語彙や表現を使うよう意識させた。	
③ 読む	まず、読むことの前提となる漢字と漢字語彙の習得を最優先した。読解テキストについては、中級後半程度のものから徐々にそのレベルをあげていき、6週間で13編の読み教材を扱った。コース開始当初は、事前課題とした予習シートもなかなか埋められなかったが、最終的には予習シートの完成度もかなり上がり、読解力の伸びが感じられた。	
④ 書く	読解の予習シートへの記入、文型の宿題(短文作成)のほか、小説プロジェクトの発表シート、レクチャーのまとめ、司会を担当した討論のためのレジメなど、毎日何らかの形で書く作業を行った。そしてサマーコース6週間をかけた取り組みとして、7ページの論文を作成した。	
VIII 校外学習		
日 時	7月 24日(火)	
行 き 先	報知新聞社	

活 動 内 容	<p>報知新聞社を訪問、コンピュータによる新聞紙面作成の過程、印刷工程の流れを見学し、新聞記者や編集局長と懇談の時間を持った。</p> <p>見学に先立って、品川駅ビル内のカフェに集合、当日朝の新聞各紙を広げて各新聞の見出しや記事内容の特徴の確認、新聞によく使われる用語の意味を考えるタスクを行った。</p> <p>新聞社に到着後は、まず編集部において新聞紙面の作成プロセスについて説明を受けた。説明ののち、2名の学生が実際にコンピュータで編集画面を操作し、自分の名前の入った1面トップ記事の紙面作成をさせてもらうことができた。その後、記者によるインタビューも受け、「ICUの7人が報知新聞社を訪問」という記事が載った紙面のゲラが見学終了時に全員に配布され、大変良い記念となった。</p> <p>また、編集局長から、スポーツ新聞の紙面構成、記事、読者層の特徴、新聞社への就職事情など大変貴重なお話を伺うことができ、学生たちも大変熱心に聞いていた。</p>
---------	---

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

・良かった点

今年のC7Aクラスは、日常会話においてはネイティブ並みの力をもつものの、読み書きとなると中級前期程度の力しかない、いわゆる4技能に大きな差がある学習者たちが対象であった。その差を少しでも埋めるべく、授業の前半ではとにかく漢字と漢字語彙の学習に集中させた。その成果が3週目ぐらいから現れてきて、最初の頃には非常に苦労していた読解も、4週目以降はかなり読めるようになってきたことは評価できる点である。また、当初かなり困難に感じられた論文プロジェクトであるが、後半学生たちも相当に頑張った結果、思いがけず完成度の高いものが残せた。このプロジェクトが成功した理由として考えられるのは、プロジェクトが各人にとって本当に興味のあるテーマを選び、論文作成に強い動機付けがなされたこと、また個人作業であったことで、それぞれの個性や持っている能力が最大限に引き出されたということがあげられる。

・反省点、今後の課題

いわゆる継承語クラスとしてC8レベルの学習者がいなかったこともあり、通常のC7クラスの兄弟版とも言える継承語教育系のC7Aクラスをスタートとすることになった。コース開始当初は、C7クラスと同様のレベルを保とうとしたがすぐに、漢字力、語彙力、読解力にC7とは大きな隔たりのあることが判明し、コース開始間もなく予定を大きく変更せざるを得なかった。プレースメントの結果だけでは分からない面もあるが、結果的にはC6レベル位の設定でちょうど良かったのかもしれない。

また、力を入れた漢字学習では前半少しオーバーペースになってしまい、消化不良の部分が出てしまった。学習者は、これまでにほとんど漢字学習をしたことがないということで、もっと復習をしながら定着をはかるべきだったと思う。文型については、今回テキストの一部しか扱えなかったが、やはり格助詞相当語などを用いた文章表現は苦手であるので、より多くの文型について導入・練習したいところであった。また敬語については、ビジターセッションを利用して練習する機会を設けたが、一度や二度で身につくものでもなく、もう少し継続的、体系的に指導をしなければいけない部分であろう。

学習者たちは、自身の日本語力のアンバランスな部分として、漢字と漢字語彙の知識が圧倒的に不足していること、また日常的に使われている話し言葉表現とはまったく異なる書き言葉特有の表現が非常に多く存在することを知り、日本語学習の必要性を痛感したようだった。6週間という短い期間の中でできることは限られていたが、学習

者たちは強い動機を持って真剣に取り組む、それぞれがコース開始時では想像し得なかった日本語力を身につけてくれたと思う。

既存の日本語教育のシラバスではうまく対応できないこのような学習者たちが、今後もサマーコースに参加してくると思われるが、その際は、高い口頭表現能力を活かしつつ、漢字と漢字語彙の知識を土台とした読解力・文章表現力をいかに身につけていくかということが、コース運営のカギとなるのではないだろうか。 以上

C7		1 セクション
Ⅰ 担当講師名		
嘉山郁美(コースヘッド)、藤崎泰典		
Ⅱ 学生のうちわけ		
学生数	7 名	男性 1 名 ・ 女性 6 名
国籍	アメリカ 2 名(日系 1 名含む)、韓国 1 名、日本 3 名、フランス 1 名	
Ⅲ 教材(書名、扱った課の番号など)		
主教材	<ul style="list-style-type: none">- 『映し世のうしろ姿』より「困った謝罪癖」 藤原新也- 『『ありがとう』と言わないモンゴル文化』 アルタンザガス ダバドルジ- フリーペーパー 「自己ゴミ化計画」 藤原新也- 『プロ論』より「働くことがイヤになった時」 養老孟司- 毎日新聞より 「生きる自信をもてるなら」- 教科書『国境を越えて』より「日本人の飽食を支える開発輸入」(新曜社)- 『日本人の価値観・世界ランキング』より「日本人の『グローバリゼーション』のイメージは不安先行」 高橋徹- 『こうばしい日々』より「綿菓子」 江國香織- AERA より『『偽装食品』本当にあった怖い手口」- 「蜘蛛の糸」 芥川龍之介- 『アナタとわたしは違う人』より「『お母さん』と言う女 vs『ママ』という女」 酒井順子- 「やがて哀しき外国語」 村上春樹- Voice より『『赤ちゃんポスト』設立の決意」蓮田太二- 毎日新聞より 「ニートの若者たち 本当は働きたい？」- 東京新聞より「都立高校へイキタイ」多文化共生センター- 『鈍感力』より 「ある才能の喪失」 渡辺淳一- 選択(小説)「キッチン・満月」 吉本ばなな 他	
副教材	<ul style="list-style-type: none">- 「どんな時どう使う 日本語表現文型 500」 アルク 1課～18 課	
視聴覚教材	<ul style="list-style-type: none">- 民放 「世にも奇妙な物語ーレンタルラブ」- ニュース 「ゴミを宝に バイオ燃料最前線」- 民放 「世界一受けたい授業ー書道」- 映画 「博士が愛した数式」- NHK 「プロジェクト Xー女性たちの 20 年戦争」	

Ⅳ コースの目標	
<p>本コースは外国語として日本語を学ぶ学生にとって最も上級レベルのコースである。このコースでは、「話す」「聞く」「読む」「書く」の四つの技能において、日本語母語話者により近いレベルに到達することを目指し、日本語で行われる大学の授業に参加できるようになることを目標とする。</p>	
Ⅴ 評価の基準	
授業参加	5%
宿題： 予習シート	15%
課題レポート	5%
クイズ（漢字・文型）	20%
スピーチ（討論・ディスカッション）	10%
個人プロジェクト	20%
試験： In-class Writing	5%
中間試験	10%
期末試験	10%
Ⅵ 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
<ul style="list-style-type: none"> - 読解 4～6 コマ - 表現文型 2 コマ - 論文 2 コマ - 討論 2 コマ - 聴解 1～2 コマ - ビジターセッション 1 コマ <p>試験や校外学習などのスケジュールにより週によって多少の違いはあった。その他、必要に応じて敬語・授受動詞・動詞活用形(受身・使役・意志形など)の復習などを行った。</p>	
Ⅶ 授業の内容	
① 聞く	テレビのニュース、ドラマ、情報番組、映画などの視聴を通して、正確な情報の取得に努め、語彙・表現・内容の確認ののち、意見・批評・感想等を述べ合った。
② 話す	読解・聴解のまとめとして、理解したものについて口頭で意見を述べ合った。討論のクラスでは、あるテーマについて2グループに分かれてそれぞれの主張を聞かせることで、論理的にかつ効果的に自分の意見を主張する練習を繰り返した。ビジターセッションでは、敬語の練習、論文のためのインタビュー活動などを行った。
③ 読む	新聞記事、雑誌記事、評論、エッセイ、文学作品など、様々なジャンルのものを読みながら語彙・表現を学び、理解したものについて要約したり、意見・批評・感想等を述べたりした。また読み物に出てきた漢字を翌日にクイズした。
④ 書く	論文の書き方を学び、各自それぞれのテーマで行った個人プロジェクトの結果を論文にまとめた。また、学習した語彙や表現文型を用いて文化プログラムの講義内容をレポートした。
⑤ 文型	指定された表現文型について、学生が作ってきた短文をクラスで共有しながら確認し、さらに応用練習をした。翌日に文型クイズを行った。

Ⅷ 校外学習	
日 時	8 月 3 日 (金)
行 き 先	靖国神社内遊就館、及び、NHK スタジオパーク
活 動 内 容	<p>神社内の博物館にて戦争にまつわる史料を実際に目にし、授業内で出てきた憲法改正問題について深く掘り下げて考え、また、国内外で批判の対象となっている参拝をめぐる問題についてもさらに話し合う機会となった。NHK スタジオパークでは、ニュース原稿を読むアナウンスサー体験やアフレコ体験、最新技術による映像と音の世界の体験などをした他、世界初の立体ハイビジョン映像なども見ることができた。</p>
Ⅸ 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
<p>良かった点として二点挙げたい。まずはほとんどの学生が非常に学習意欲が高く、各課題に積極的にかつ真剣に取り組んでいたことである。具体的には、毎日紹介される新しい学習項目を最大限に使用しようと努力している姿が見られ、また間違いの訂正などにもめげることがなく、適度な緊張感の中に学生同士の静かな競争心が芽生え、お互いに刺激あっていた。その前向きな学習態度は、出席率(7人中5人は100%)や日々の予習・復習、課題提出等にも現れていて、積極的な共同参加型のクラスの雰囲気を作り上げるのにも大きく貢献していた。二点目は口頭表現能力/方法の向上についてである。家族や友人との日常会話には全く問題のない学生たちであったが、コース開始当初はアカデミックな場にふさわしいフォーマルな話し方、また文化的に適切な表現方法等には慣れていなかったため、不適当な表現の使用も多々見られた。また、質問に対する的を射た答え方にも苦労していた。そのため、これらの点について随時指摘して訂正し、必要に応じて別の表現方法なども紹介し、発言する際にはそれらを常に意識させた。その結果、特に討論のクラスにおいては、ただ言いたいことを言い合うのではなく、「相手の意見を受け取った上で、論拠を示しながら自分の意見を述べる」という議論における交渉技術が格段に上達した。実際、討論は毎回白熱した論議が繰り広げられ、このコースで最も成果が表れた部分であると言える。こうした討論の技術は、読解や聴解のクラスでも生かされていた。</p> <p>論文については、良かった点と反省点と両方を述べたい。個人プロジェクトにおいて各自論文を書き上げたが、日本語で論文を書くという作業がほとんどの学生にとって初めてのことであり、特有のスタイルを学びながら研究も進め指定枚数(A4サイズの紙にシングルスペースで7枚)を満たす、という課題はかなりきつかったと思われる。特に、読み手に分かりやすいように論理的なつながりを明らかにしながら論を進めていく、という点で多くの学生が苦労していた。しかし推敲の末、最終的にはほとんどの学生が指定枚数をはるかに超える長さの論文を形式にのっとり書き上げていて、これは彼らに大きな達成感をもたらしたであろうと思われる。そのような結果に到達できたことは喜ばしいことである。反省点としては、「時間」を挙げたい。学生はタイトなスケジュールの中でかなり逼迫して論文の作業を進めていて、一方、教師側にとっても学生個々の問題に対応するには午後の個別指導の時間だけでは足りず、双方の時間不足の結果、他の授業を圧迫せざるを得なかった。学生それぞれが別の問題を抱えて別の作業をしているのだから、それに応じた指導をするにはもっと個人指導の時間が必要であった。そうすることができれば、論文の完成度はもっともっと高まったはずである。指導をしながら、カリキュラム全体に占める論文の位置づけと、6週間という限られた時間内での課題設定の仕方を見直すことが必要であると感じた。</p> <p>さらに時間について言えば、論文についての反省点と重なるが、個人のニーズに対応する時間が圧倒的に足りなかった。クラス単位で授業を進めている時に個々の学生の弱い点を十分に指導することには無理があるため、どうしても個別指導の時間を使うことになるが、週に一度、または二度のミーティングだけでは十分ではなかった。そのほとんどの時</p>	

間を論文の指導に当てざるを得なかった状況もあり、論文以外の問題は置き去りにされたままになってしまった感がある。特にこの上級レベルにおいては、各学生のバックグラウンドが大きく異なりそれによる日本語の問題点にも大きな差異があったので、個別指導が有効だったはずであるのに、それが時間的に十分できなかったことが非常に残念である。

最後に今後の課題としてカリキュラムのあり方を挙げたい。今回は「通常コースと同等に」ということを念頭におき、それを非常に意識したカリキュラムとなったが、通常コースとサマーコースでは期間も日々の授業時間数も異なるため、サマーコースのカリキュラムに通常コースの内容を組み込んでいくだけでは必ずしも上手く機能しないというのが実感である。「同等のことをする」というよりも、サマーコースの特性と上級コースの特色を考慮した上で、それを生かして、結果的に「通常コースと同等の成果を上げることができるカリキュラム」を考えたいほうが、学生のためになるのではないかと思う。よりサマーコースに適したカリキュラムを組む柔軟性があっていいと感じた。